

銭形平次捕物控

たぬき囃子

野村胡堂



「親分、あつしは、気になつてならねえことがあるんだが」
「何だい、八、先刻さつきから見ていりや、すっかり考え込んで火鉢へ雲脂ふけをくべているようだが、俺はその方がよつぽど気になるぜ」

捕物の名人銭形の平次は、その子分で、少々クサビは足りないが、岡っ引には勿体もったいないほど人のいい八五郎の話を、こうからかい、気味に聞いてやつておりました。

遅々たる春の日、妙に生暖かさが睡ねむりを誘つて、陽ひが西に廻ると、義理にも我慢の出来なくなるような薄霞うすがすんだ空そら合あいでした。

「ね、親分、あつしは、あの話を、親分が知らずにいなさるはずはねえと思うんだが——」

「何だい一体、その話でえのは？ 横町の乾物屋のお時坊が嫁に行つて、ガラツ八がが、つ、かりしているつて話ならとうに探索が届いているが、あの娘この事なら、器用にあきらめた方がいいよ、町内の良い娘いが一人ずつ片付いて行くのを心配しんぺえしていた日にや、命が続かねえぜ」

「冗、冗談でしょう、親分、誰がそんな馬鹿なことを言いました」

「誰も言わなくなつて、銭形の平次だ、それくらいのことには目が届かなくちや、十手捕縄を預かつていられるかい」

「そんな馬鹿なことじゃねえんで——あつしが気にしているのは、親分も薄々聞いていなさるでしょうが、近頃大騒ざわぎに

なっている本所の泥棒——、三日に一度、五日に一度、選りに選つて大家たいけの雨戸を切り破る手口は、どう見ても人間業わさじゃねえ。石原の親分じゃ心もとないから、いずれは、銭形の親分に出て貰つて、何とかしなきゃア納まりが付くめえ——つて、先刻も銭湯で言つていましたが、あつしもそりやアその通りだ、うちの親分なら——」

「馬鹿野郎ツ」

みなまで言わせず、平次はとぐろをほぐして日向ひなたへ起き直りました。

「へえ——」

「へえ——じゃないよ、世間様の言うのは勝手だが、手前てまえまでそんな事を言やがると承知しねえよ」

「相済みません」

「本所は石原の兄哥あにきの縄張だ、頼まれたって俺の出る幕じゃねえ。それに、石原の兄哥にケチなんぞ付けやがって」

「——へエ、面目次第もございません」

「馬鹿だなお前は、なんて恰好だい、借金の言い訳じゃあるまいし、そう二つも三つも、立て続けにお辞儀をしなくたってよかろう。それに、膝ひざつ小僧あわせなんか出してさ。一体お前なんか、そんな身幅の狭い袷あわせを着る柄じゃないよ——ウ、フ」

平次もとうとう吹出してしまいました。こうなると、何の小言を言っていたか、自分でも判らなくなってしまう。

「御免下さい」

折から、入口の格子の外で、若い女の声。

「八、ちよいと行って見ておくれ、どうせお静の客だろうが、生憎あいにく買物に出たようだ」

「へエ——」

ガラツ八の八五郎は、それでも素直に立上がって今叱られたばかりの狭い袷の前を引つ張りながら縁側から入口を覗きました。何を見たか、弾き返されたように戻って来て、

「親分、た、大変」

日本一の酸すっぱい顔をします。

「何だ、騒々しい」

「石原のが来ましたぜ」

「利助りすけ兄哥か」

「いえ、娘のお品しなさんの方で——」

「何だ、早くそう言えばいいのに、丁寧にくつちへお通しするんだ。それから、お茶を入れる支度をしてくれ、——いつまでもそんなところに突つ立ってる奴があるかよ、坐つて取次

ぐんだぜ、膝つ小僧に気を付けな、お品さんに笑われるじやないか」

平次は小言を言いながらも、この面喰らった正直者を、かば庇うような眼差しで見送りました。

二

お品というのは、石原の利助——平次と事ごとに張合った、本所の御用聞——の一人娘で、この時二十三だったでしょう。二三年前一度縁付いて、夫に死なれて父親の許へ帰って来ましたが、若後家というよりは、いかにも娘々した、水のしたた滴りそうな美しい女振りでした。

襟えりの掛かつた黄八丈きはちじょう、妙たぎに地味じみな縹しゆす子の帯おびを狭せまく締しめて、髪形かみかたちもひどく世帯染よせみてますが、美しさはかえつて一入ひとしおで、土産物みやげものの小風呂敷こふうしゆを、後ろの方うしろのほうへ慎しんましく隠かくして、平次へいじの前まへへ心持こころもち俯向うつむいた姿すがたは、傲慢ごうまんで利かん気で、苦虫くちゅうを噛かみ潰つぶしたような顔かほを看板かんばんにしている親おやの利助りすけとは、似にも付つかぬ優やさしさのある娘むすめです。

「お品しなさんが来てくれるとは珍しいネ、お静しずかは折悪せつあくしく買物かひものに出でかけたが、どうせすぐ帰かへるだろう、ゆっくり話わしていつて構かまわないだろうネ」

小さい時から知しっている平次へいじは、ツイこういった、わけ隔へだてのない心持こころもちで、渋しぶい茶ちやなどを入れてやりまし。

「有難ありがたうございます。そうもしてはいられません、——実じつは折入せりいつてお願いごんがいがあつて伺うかがいました」

娘はモジモジして、何やら言い兼ねている様子です。

「お品さんが、私に？　へエ——どんな話かは知らないが、私に出来ることなら何なとして上げよう——何、人が居ちや言いににくい話？　大丈夫、お品さんも知っている八五郎が一人居るだけで、あとは皆んな出払っている。八なんざ馬みたいなもので、何を聞かしたって構やしない——あッ、そこに居たのか、ハッハッハッハッ、こいつは大笑いだ」

平次の高笑いに吹飛ばされたように、ガラッ八は納まりの悪い顔を、次の間へ引込めてしまいました。

「実は親分、お聞きでしょうが、あの本所の押込み騒ぎ——、昨夜は六軒目ゆうべで、番場町の両替渡世井筒屋清兵衛りょうがえとせい いづつやせいべえがやられました」

「そうだってね、利助兄哥もさぞ心配だろう」

「それが親分、困ったことになってしまいました。なにぶん入られたのは六軒とも大きい家ばかりで、盗られた金も少ない上、昨夜はどうとう人まで害めるようなことになったのでございます」

「ほう、それは大変」

「井筒屋の旦那が、折悪しく目を覚して、縁側まで出たところを、脇差で袈裟掛けさがけに斬られたのだそうでございます」

「フム」

「そうでなくてさえ、石原のも年を取ったとか何とか、世間ではうるさく言いますし、お上の方でもこの間から、何かとやかましくおっしゃいます。石原の利助が、五十近くになって、十手捕縄を召上げられるような事があっては、世間へ合わせる顔もないと言つて、夜の目も寝ずに飛廻りましたが、今度ば

かりは何としても手掛りがありません。あの負けん気の父が、すつかり気を腐らして、三日前からとうとう寝込んでしまうような始末でございます」

「それは気の毒な」

「今日も、平常ふだんお世話になっている、井筒屋の旦那が殺されたというのに、行つてみることも出来ません。子分衆に任せ、一人で気を揉もんでおりますが、御存じの通り、身内にもあまり役に立つのもありませんので、はたで見ている私の方が気が詰まるようでございます」

お品は涙ぐましい眼を落して、しばらく声を呑みました。

「それは、さぞお困りだろう、私に出来ることなら、して上げたいが——」

「親分、私は親に隠れて、お願いに伺いました。このまま放つ

ておけば、石原の利助の一代の名折れ、十手捕縄を召上げられないものとも限りません」

「……………」

「日頃は親分との間に、面白くない事もあるように聞かないではありませんが、親分は江戸中で評判の腕利き、それに、人の難儀を黙って見ていらつしやる性分でないことも存じております。どうぞ、親子を助けると思召して、一と肌脱いでは下さいませんかでしょうか、親分、お願いでございます」

お品はいつの間^にやら、畳の上へ、水仕事で少し荒れているが、娘らしく光沢^{つや}のある、美しい手を落して、そつと袖口^{まぶた}を脛^{まぶた}に当てました。

若々しいと言つても、御用聞の娘に育つて、一度は縁付いたこともあるお品は、こう話をさせると、筋も通り情理も立つ

て、隣の部屋で黙って聞いているガラツ八などよりは、余程性根の確りしたところがあります。

「お品さん、よく判った。実は兄哥にすまないから、遠慮していただだけの事で、そんな事に骨惜しみをする俺ではない、何とか角の立たないように、蔭から目鼻を開けて見よう——そう言うのと、この平次はひどく器量がいいようだが、決してそんな自惚うぬぼれの沙汰じゃない。人が変ると見様みようも変って、とんだ手柄をすることがあるものだ」

「有難うございます、親分」

「まだ礼を言うには早いよ。ところで、縄張違いの私では飛込んで行っても何かと困ることがあるだろう、お品さんにも少しは手伝って貰えるだろうネ」

「それはもう」

「女御用聞もшыれてゐるだろう、ハツハツハツ、これは冗談だ」

平次はわだかま蟠りない調子でこう言うと、お品もツイ誘われたように、濡れた顔を挙げて、淋しくニツコリしました。

その時ちようど、お静も帰つて来た様子。

「それじゃ、あまり遅くならないうちに、一と走り番場町の井筒屋まで行つてみてくるとしよう。お品さんは大した用事もあるまいから、お静を相手に、ゆつくり遊んで行きなさるがいい」

平次はガラツ八を促し立てながら、お静と入れ違いに、怪盗の跡を尋ねて、本所へ馳はせ向いました。

「錢形の親分、有難うございました。親分がお出で下さればくせもの曲者は捕まったも同じことで——」

井筒屋の番頭の言葉は、追従ついでとばかりは聞えませんが。土地でともかく、怖い者に思われている石原の利助さえ来てくれないのですから、主人の命と、二三百両のありがね有金をやられた井筒屋にしては、その頃評判の御用聞、錢形の平次の顔を見るのは、全く救いの神のようなものだったのです。

「けんし検屍は済んだのかい、番頭さん」と平次。

「へエ、昼前に済んで、主人の死体も始末いたしました。人

間業らしくない泥棒が、本所中の大家たいけを荒し廻るとは聞きましたが、まさか、人を害あやめるとは思いませんでした」

「とんだ災難だったネ」

「へエ、有難うございます。こんな事と知つたら、場所柄で、関取衆でもお願いしておくのでございました」

平次は番頭の愚痴に追つ掛けられながら、何かと見て廻りました。家族はかなり多勢おおぜいですが、打ちのめされたように、悲嘆の床の中に居る女房、まだ小さい子供達、奉公人、いづれも疑わしい者は一人もなく、泥棒は明らかにこの間うわきから上っている本所荒らしで、もう六軒も押入つてることですから、家の中では、何にも探しようがあるとは思われません。

「済まないが番頭さん、雨戸をすつかり締めて、昨夜泥棒が

入った時と同じようにして貰えまいか」

「へエへエそれは、わけもないことで」

井筒屋の雨戸をすつかり締め切ると、平次は一応外へ出て縁側をひと廻りしました。泥棒の入ったのは、南の縁側、僅かばかりの隙から鋸を入れて、かなり大きい穴を二つまで開けた上、輪鍵も棧も易々と外したことはよくわかります。

平次は有合せの鋸を借りて、

「八、手前てめえこれで外から雨戸を引いてみな、泥棒になったつもりで、出来るだけ静かにやるんだよ」

と平次。

「そんな事はやりつけないから、うまく行かないかも知れませんが、せんよ、親分」

「馬鹿野郎、そんな事をちよいちよいやられてたまるものか」

平次は冗談を言いながら、家の中へ入って、主人の寝部屋に陣取りました。

「ようがすか、親分」

「黙ってゴシゴシやりな、いちいち断る泥棒なんてものはいよ」

「……………」

ガラツ八は、泥棒の鋸引きにした雨戸へ、廻し鋸を入れて少しずつ、少しずつ引いております。

白昼、四方は相当やかましい時ですが、それでも、鋸の音は手に取るよう、両替屋の主人や番頭——日頃窃盗や押込に敏感になっている者が、どんなによく睡ねむっていたにしても、これだけの細工を知らずあけがたにいるはずはありません。

「泥棒の入ったのはあけがた暁方だと言ったね、番頭さん」

と平次。

「へエ——かれこれ、寅刻ななつ（四時）過ぎでございましたか、旦那様の声に驚いて、駆け付けた時は、雨戸は一枚開けっ放しになって、薄明りが外から射しておりました」

「月はなかったはずだね、昨夜は？」

「四月の七日でございます。お月様は夜半にはなくなります」
平次は、薄暗い中で、そのまま腕こまぬを拱きました。

「八」

「へエ」

「もうたくさんだよ」

「そう言わずにもう少し、あとちよつとでかまち框に届きますよ」

「馬鹿だな、そんな事したら雨戸は台なしだ、泥棒ごっこはもうたくさんだよ」

「そうですかね、こんなお手伝いならいつでもやりますよ」
「呆あきれた奴だネ」

四

「ところで番頭さん、あれだけの鋸引きが、聞えなかったのはどういいうわけだろう。あんな大穴を二つもあけるには、どうしたって半刻ほんとき（一時間）はかかるが」

平次には腑ふに落ちないことばかりです。

「それがネ親分、昨夜ゆうべは狸たぬき囃ばやし子がひどくて、どうしても寝付かれなくて弱ったくらいですから、暁方あけがたになつてぐつすり寝込んだのでございましょう。あんな大穴を開けるのを、目敏めびと

いのが自慢の私が知らないはずはありません」

番頭は妙な事を言い出します。

「狸囃子——？」

「え、本所七不思議の一つの狸囃子でございますよ。こんな場所ですから、狐や狸のいるに不思議はありませんが、近頃はそれも毎晩のようで、うっかりすると寝そびれて、暁方になってウトウトすることがございます」

「それは変った話を聞くものだな、本所の狸囃子というのは話の種にはなっているが、ほんとう真当にそんなものがあるとは思わなかったよ」

「知らない方は皆んなそうおっしゃいますが、一度本物を聞くと、不気味でなかなか寝付かれるものではございません」
「やはり狸が腹鼓でも打つといったことかネ」

と平次。

「そんな手軽なもんじゃございません。太鼓と笛で、馬鹿囃子そっくりですが、それが、遠いような近いような、陰いんに籠こもつたような、口ではちよいと申し上げにくいような不思議なものでございます」

番頭はすっかり怯おびえているものと見えて、この話になると妙に眼が据すわって真剣になります。

「笛まで入るのは念入りだね、どこの森でやっているとか、どこの木立でやっているとか、おおよその見当ぐらいは付くだろう」

「それが親分、不思議なんで、ずいぶん腕に覚えのある方が、狸退治をやるんだと言って、囃子の音に見当を付けて、出かけてみるんだそうでございますが、東かと思つて出かけると、

西の方から聞え、南の方のつもりで探していると、北に移るんだそうでございます」

「へエ、それは面白いな」

「ちつとも面白くはございません。私どもが聞いたんでも、あづまばし吾妻橋の佐竹様のお屋敷のあた辺りかと思うと、まつくら松倉の方に變り、はらにわ原庭のしやうげんじ松巖寺の空地かと思うと、急に荒井町の方角に變つたりいたします。狸囃子というものは一体こうしたもののなんだそうで、大概の方は狸退治どころか、へトへトになつて歸つてしまいます」

「いよいよ面白いな、泥棒が狸だとすると、づかフン捉まえると狸汗が出来るだろう。ガラツ八、一杯飲めそうだぜ」

平次はすっかり悦に入つて、あつけ呆氣にとられているガラツ八を顧みました。

「親分、狸が雨戸を破つたり、人を斬つたりするでしょうか」
「そこだよ、俺にも解らなくって弱っているのは」

平次はこんな気楽な事を言いながら、一度締め切つた雨戸を開けさせて、今度は、斬られた主人清兵衛の死体を、一応見せて貰いました。

右の肩から胸へかけて、たつた一と太刀たち、袈裟掛けさがけに斬つた手口は、恐ろしい腕前で、とても狸や狐の仕業とは思われません。

「親分、こいつは狸にしちや器用すぎますぜ」
とガラツ八。

「馬鹿、世の中には、どんな狸がいるか、手前なんか解つてたまるものか」

「そうですねえ、親分」

「ところで番頭さん、その狸囃子は、何刻ほど続くんだネ」

「宵から始まって、夜中まで、いやどうかしたら、暁方まで

続くでしょう。遠くなったり近くなったり、あれが始まった
 晩は、とても睡ねむられるこつちやございません」

「根気のいい狸だネ」

平次はそれつきり黙ってしまいました。狸に興味を失った
 のでしょう。

「八、この泥棒狸の手口は、もう少し見なきやア解らないよ
 うだ。この間から入られた家を、一軒残らず歩くとしよう」

「へエ——大変ですネ、そいつは」

「骨惜しみしちや、いい御用聞にはなれないよ。まず黙って
 伴ついて来な、帰りは石原の利助兄哥のところを覗いて見舞で
 も言っ行って行こう」

五

平次とガラツ八は、それから日取りを逆に取つて、泥棒に入られた家を六軒、すっかり見てしまいました。

井筒屋の前に入られたのは、原庭の物持ち後家ごけで、お紺こんといふ四十年配の金貸し、これは幸い怪我けがはありませんが、用筆筒ようだんすごと庭に持出されて、有金ありがね三十両ばかり盗とられたのを、夢にも知らなかつたという話、手口は井筒屋と同じこと、雨戸を切り開いた鋸目のこぎりめから、宵のうちから、狸囃子が聞えたことまで、そっくりその通りです。家族はお紺の外に用心棒とも手代ともなく使っている嘉七かしちという三十男と、下女が一人。

その前に入られたのは、中なかの郷ごうの長源寺ちようげんじという寺、これも手口は同じことですが、奪とられたのはほんの二三両、住職がつましいので、金があるという評判に釣つられた泥棒しじりの失敗とわかりました。庫裡くらりの雨戸あまどの鋸目のこぎりから、狸囃子ねじりが宵から聞えたことまで型の通りです。

その前は旗本、瀬川せがわい壱岐いき、松倉町の大きい屋敷ですが、身分に恥じて届出もしなかつたということ、平次も入つて見るわけには行きませんが、手口にも狸囃子ねじりにも変りがなかつたことは、近所の人が証明しております。

その前は表町おもてちょうの酒屋、和泉屋徳次郎いずみやとくじろう、これも、型の通り、とところで、一番最初に入られたのは、中の郷で、裕福に暮している石上いしがみ左伝次さでんじという浪人者、二三年前まではさる大藩に仕えましたえが病身びやうみなのと、殿様が無法なので自分から退転した

という五十年配の人物です。家族は内儀と娘が一人、雇人は昔の草履取りであつたという四十男が一人。

こう調べ上げて石原の利助のところへ寄つたのは、もう夜でした。

「兄哥あにき、加減が悪いそうだな、どんな塩梅あんばいだ」

「お、銭形のか、遠いところを、わざわざ気の毒だつたな、なアに大した事じゃねえが、風邪を引いたのに、疲れが出たんだろう、明日あたりから、仕事の方に取つかかろうかと思つている」

利助は襦袍どてらを引っかけて、長火鉢の前へ出て来ましたが、何となく勝すぐれない顔をしております。

「まあ、大事にするがいい、無理をしちや後へ悪かろう」

「お品の奴が心配して、医者を呼べの、お詣まいりをするのと言

うが、この年まで、薬というものを嫌いで通した利助だ、今さらそんな事をしたって、何の足しになるものじゃねえ」

顔色は悪いが、相変らずの利かん気で、平次もすつかり、今日の始末を打明けそびれてしまいました。

そのうちに、お品は、晩の用意をして一本つけて参ります。「何にもごさいませんが、有合せで」

といったような取りなし、これは馴れ合いづくですから、平次も遠慮するようないような、ズルズルベツタリさかすき盃を嘗なめていると、やがて戌刻いっつ（八時）という頃。

「おや、ありや何だい——」
遠くの方から節面白く、太鼓と笛の音ねが聞こえて来たので
す。

「あ、また始まりやがった」

石原の利助はあまり気にする様子もありません。

「何だいありや、兄哥」

「狸囃子さ、馬鹿馬鹿しい」

「押込の入った晩には、必ず狸囃子が宵から聞えるつていうが、あの音なんだネ」

「世間じゃそんな事を言うが、まさか狸が泥棒と共謀ぐもるになっているわけじゃあるめえ」

「いや、そうでもないよ兄哥、俺は一つ、明日は狸狩りをやろうと思うんだが、若い者を少し貸して貰えるだろうネ」

「構わないとも、どうせ遊んでいるようなものだ。あの泥棒ときた日には、若い者なんかの手に負える代物しろものじゃねえ」

平次は間もなく暇いとまひ乞いをして出ました。が、門口かどぐちへお品を呼んで、何やら耳打ちするとそのままガラツ八をつれて、神

田の家とは方角違いの、原庭の方へ道を急ぎます。

「親分、どこへ行きなさるんで」

とガラツ八。

「黙ってついて来るがいい、狸のお宿を探すんだ」

「へエ——」

ガラツ八は渋々ながら、平次の後から、影のようにピタリとひっ付いて、やって行きました。

井筒屋の番頭が言ったように、馬鹿囃子はしばらく原庭の方から響いておりましたが、平次が原庭へ行つた頃は、いつの間にか方角が變つて、それが松倉の方になっております。

「親分、あまりいい気味じゃないネ」

とガラツ八。

「何をつまらない、狸の方でガラツ八さんが怖いって言って

るぜ、黙ってついて来な」

平次は昼一度歩いた通り、原庭の金貸し後家のお紺の家から逆に取りつて、中の郷の石上左伝次の家まで五軒をいちいち調べて廻りましたが、さて何の掴みどころもありません。相変わらず狸囃子は、どこからともなく、人を馬鹿にしたような長閑さで聞こえております。

「今晚もまた、どこかへ入られるだろうが、困ったことに防ぎようがない、ガラツ八、帰ろうよ」

「へエ——」

二人はいつの間にか大川端おおかわばたに出ておりました。

「明日は一つ狸退治だ。畜生ツ、その時こそ逃しはしねえぞ」

六

翌あくる日の狸狩りは、本所中の物笑いの種になりました。

銭形の平次は、子分のガラツ八を伴つれて神田からわざわざやつて来ると、利助の子分を十人ばかり駆り集めて、西は大川、東は業平橋なりひらばし、南は北割下水、北は枕橋の間を、富士の巻狩りほどの騒さわぎで狩り出したものです。

平次は脚絆きやはんに草鞋わらじといった装束で、手槍てしやうを担かぎ、子分達はさすがにそれほど大袈裟おおげさには用意しません、それでもいい若い者が、百姓一揆いっげんみたい、竹槍たけやりまで提ひげて押し廻まわしたのですから、本所中はお祭まつりのような騒さわぎ。

朝から始はまって夕刻ゆふくまで、藪やぶという藪、林はやしという林、墓地

から田圃たんぼから、町家の裏、軒の下、下水の中まで探し廻りましたが、狸はおろか狐も猪むじなも飛出しはしません。見かけたのは野良犬とドブ鼠ねずみがせいぜい、野次馬がゾロゾロついて歩いて、江戸っ子特有の辛辣しんらつな皮肉を浴びせるので、子分達は顔を赤くするような有様です。

陽が暮れて引揚げる時、利助の子分に一分ぶずつはずんだので、その方の悪口あっこうは封じましたが、世間の噂うわさはまことにさんざん。

「見や、銭形とか何とか言つたつて、あの態さまは何だい。石原の親分が病気でなきやア、あんな馬鹿なことを黙つて見ちやいめえ」

「全くだよ、狸が泥棒したつて話は、開闢かいびやく以来だ。猫に小判ならわかるが、狸に小判じゃ洒落しやれにもならねえ。神田からわ

ざわざ本所まで恥をかきに來たようなものさ」

いやもう滅茶滅茶です。

平次はしかし驚く様子もなく、一向平氣な顔をして、予期した幕切れを待つておりました。

それから三日目、とうとうその日が來ました。

「親分、お品さんが見えましたよ」

取次ぐガラツ八をかき退ける^のように、平次は待つていましたと言わぬばかりに飛出しました。

「お品さん、挨拶は抜きだ、あれはどうなった？」

「親分、とうとう出かけましたよ」

「そいつはしめたッ」

「親分に言い付かった通り、押上^{おしあげ}の笛辰^{ふえたつ}の家を三日見張つていと、今日昼頃どこかの小僧が使いに來ました」

「フムフム」

「すると笛辰は夕方からブラリと出掛けたんです。よつぽど後をつけようと思いましたが、万一さとし覚られると藪蛇やぶへびだと思つて、とりあえずかご駕籠でここまで駆け付けました」

駕籠で来たくせに、あまりの緊張にお品は息を切っております。

「それで何もかも片付くだろう。平次の狸狩りにも、見る人が見れば理窟りくつがあるつてわけさね、お品さん」

「有難うございます。この上はどうか、お出かけ下すつて、手配をお願いします」

「いや、本所は石原の利助親分の縄張内だ、大急ぎで家へ帰つて、どこまでもお品さんが思い付いた事にして、原庭だいはうじの大法寺きやうぞうへあの無住になっている荒寺の経蔵きやうぞうに手を入れさせるがい

い、狸の巢はそこだ」

「……………」

「狸は弱いから、手先が二人も行けばたくさんだが、金貸し後家のお紺の家には凄^{すご}いのが居るぜ。そこへは利助兄哥と、子分の者十人ぐらいで、すっかり用意をして踏込むがいい、こつちには手強いのが要^いる」

「親分は」

「俺は行くまでもないだろう、狸はもう罌^{わな}に落ちているんだ」
「でも」

お品はひどく心許ない様子でしたが平次に追い立てられて、石原の家へ駕籠で帰りました。

その夜の捕物は、平次の狸狩りにもまして本所の人達を驚かしました。

大法寺の経蔵に向つた二人の手先は、何の造作ぞうさもなく、その中で馬鹿囃子をやっている、押上の笛辰と、その弟子で太鼓の上手と言われた、三吉さんきちを縛つて来しました。

同時に金貸し後家のお紺の家に向つた一隊は、そんな手輕なわけに行きませんでしたが、お紺を始め、その手代の嘉七かしち、下女のお松を、どうやら、こうやら大骨折で縛り上げました。後で聞くと、手代の嘉七は武家上がりだそうで、腕がなかなかしっか確りしていたので、利助の子分に二三人怪我人を拵こしらえまし

たが、幸いそれも大したことでなくて済みました。

本所を荒し廻った大泥棒、——井筒屋の主人まで殺した曲者くせものは、言うまでもなくお紺とその手代の嘉七で、狸囃子は、世人せいじんを惑わして、嘉七お紺の仕事を助ける、笛辰と三吉の仕事だったのです。その後、与力よりき笹野新三郎の調べに対して、嘉七は、「へエ、誠に恐れ入りました。狸囃子を使ったのは、本所の七不思議をもじったに相違ありませんが、実は貸本の『絵本太閤記』えほんたいこうきから思い付いたことで、日吉丸が、蜂須賀小六のところから、刀を盗み出すのに、三晩も続けて笠を雨落あまおちに置き、小六の心を疲らせて、暁方あけがたウトウトとしたところへ入って首尾よく取ったという術てを用いたのでございます。雨落の笠代りに狸囃子を使ったまででございますが、もう一つ、狸囃子を聞かせたわけは、あの囃子の音に合わせて、鋸を引くと、目の覚めてい

るものでも、ちよつと気が付かないからでございます」と言つております。

この手柄を一人占めにして、石原の利助はどんなに面目をほどこしたかわかりません。近頃は利助に愛想あいそを尽かしていた笹野新三郎も、口を極めてその頭ほのよさを褒めました。

が、利助にしては、これほど見当の違つたことはありません。自分が何にも知らないうちに、大手柄をしていたのですから、まるで夢のような心持です。

娘のお品を責めてみると、これはもう、言いたくて待ち構えていたところですから、何もかも平次の指金だつたことを一毫いちちゆうの隠すところなく言つてしまいました。

薄々平次の息が掛つているとは思いましたが、そう判然はつきりわかつてしまうと、利助もジツとしてはいられません。手土産てみやげ

を用意して、神田まで一と走り。

「平次兄哥あにぎ、面目次第もない。何もかもお品から聞いたが、狸囃子の曲者を挙げさせた指金は、兄哥がやってくれたんだつてネ」

日頃面白くない仲だけに、利助も我慢の角つのを折たつて、畳に手を突きたい心持になります。

「兄哥、冗談じゃない、俺は何を知るものか、狸狩りをやって物笑いの種こしらを拵こしらえただけさ。曲者の巢ねを突き止めたのはやはりお品さんに相違はないよ」

平次はなかなか真実ほんとうの事を言おうとしません。

「まあいい、せつかくそう言ってくれるなら、強たつて聞くまい。俺の心の中だけで、兄哥の親切を忘れなきやア——」
利助はこんな事を言つて、後は、お静の手料理で酒になり

ました。

*

「親分、あつしには腑ふに落ちない事だらけだ、利助親分に手柄をさせた心持はまあ判るが、どうしてあの曲者がお紺の家に居ると解つたんです。後学のために教えておくんなさい」とガラツ八は、利助の帰って行く姿を見送りながら、平次に向いました。

「何でもないよ、六軒の雨戸を調べると、あとの五軒は、いかにも狸囃子に合せて、半刻も一刻もかかつて引き切つたように、鋸目が細かくなっているが、お紺の家の雨戸だけは、鋸目が荒くて、一気に引つ切つたことが判つたんだ」

「なるほど」

「五軒も六軒も荒らした曲者が、物持で通ったお紺の家へ入らないのはおかしいと思われるから、自分の家へも入ったように、嘉七とお紺が細工をしたんだよ」

平次の観察は精緻せいちを極めます。

「ところで、大法寺の経蔵でやった馬鹿囃子が、どうしてあんなに近くなったり、遠くなったり、東に聞えたり、西に聞えたりしたでしょう」

とガラツ八。

「尤もつともな疑いだが、太鼓は風呂敷を被せると音が鈍くなって遠くの方で叩くように聞えるし、笛は上手になると、強くも弱くも自由に吹けるだろう」

「なるほどね」

「それから、あの経蔵には、入口が一つと、窓が二つある、その一つ一つを開けたり閉めたりして囃はやすと、音は酒井様のお邸やしきに響いたり、佐竹様の木立に響いたり、どうかすると、大川の方へ抜けたり、いろいろの方角に聞えるんだ。今度一つ試してみるがいい」

「へエ——そんな事もありますかねえ」

「まだ判らない事があるかい」

「あの日、昼一度廻ったのに、夜もう一度六軒の家を廻ったのは？」

「あれは大失策おおしくじりさ、昼は鋸目にばかり気を取られたので、夜もう一度狸囃子をやった場所を探しに行つたんだが、暗くて何にも判らなかつたんだ」

「狸狩りは？」

「そこで、翌る日狸狩りということにして、土蔵か、穴蔵かともかく、どの方角へも自由に囃子の音を響かせるにいい場所を探したんだ。お蔭で錢形の平次は間抜けになって、石原利助が器量を上げたのよ」

「つまらない事になったものですね」

「利助兄哥も、これで引込みが付き、俺もお品さんへの義理が済んだというわけさ」

平次はそう言つて豊かにガラツ八を顧みました。頭の鈍いガラツ八にも、何となく失策しくじり平次の尊さがわかつたような気がしました。

底本：「銭形平次捕物控（六）結納の行方」嶋中文庫、嶋中書店
22004（平成16）年10月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話」中央公論社
1939（昭和14）年

初出：「オール讀物」文藝春秋社
1932（昭和7）年5月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：noriko saito

2018年2月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。